

剣道連盟

沿革（活動期）

剣は心なり、心正しからざれば、剣また正しからず。剣豪として有名な島田虎之助の言葉にあるように、心身の鍛練に剣道を愛し続けた人達は多かったが、終戦後一時期剣道は中断された。昭和30年代に入り、日本古来の伝統である武道の精神、特に礼にはじまり礼に終ると教えられる剣道の心が子供達の成長に大切であるとの考えをもつ人が多くなり、禁止に近い制約を受けていた剣道の復興を願う声が大きくなり各地で剣道の稽古が戻ってきた。本町の剣道は昭和35年頃より山口秀勝が中心になり町内愛好家による稽古が復活した。当時幕別小教諭の十河も加わり子供達も通いはじめ町内の剣道熱が急速に高まってきた。昭和40年代になり千葉恵博、高橋秀昂、関根恭一、橋本正司等が参加し、稽古も一段と熱が入り少年達も多くなり剣道少年団の基礎が固った。当時町内相川に在住した全十勝剣道連盟理事長松浦俊行が相談役となって、幕別町剣道連盟が結成され初代会長に大久保正司が選出され、全十勝剣連幕別支部として発足し十勝の剣道界に仲間入りをした。支部長には山口秀勝が就任し、少年達は幕別剣道少年団を旗挙げし、町の剣道組織が完成された。

昭和44年、第1回道民スポーツ十勝大会が開催された。剣道連盟も山田一徳、妹尾英美、下直弘等、若者もメンバーに加わって連日はげしい稽古に熱中し、各大会では常に上位入賞を果し、十勝剣道界に幕別ありと名を広めた。45年には幕別町が主催、当剣連主管による全十勝剣道大会を開催、十勝管内より1千名近い剣士が集い、十勝管内では最も大きな大会となり十勝剣連の中核となって剣道の発展に大きな役割を果した。少年団の活動も一段と活発になり、札内剣道少年団が結成され、山角芳信、鳥羽誠市が基礎固めに尽力した。昭和51年、当剣連の活動が認められ、町表彰条例により、スポーツ奨励賞を授与され、黄金時代を築いた。

現況と展望（熟成期）

昭和50年後半に入り常勝を誇った歴戦の勇者達も職場でも中心的な存在になり、稽古の時間に苦慮しつつも少年団の指導に汗を流している。少年団活動は益々盛んになり札内、幕別、糠内と少年団で約100名を越える少年達が竹刀の音を響かせ汗を流している。札内少年団には、十勝剣道界の重鎮で、剣道、居合道を極めた帯広在住の武道家、筒田芳包氏が出稽古に通い田崎迪夫、二ツ山智、岩倉守、吉田久治、中橋定雄等も加わって、正に剣道を通じた人間教育に力を注いでいる。幕別少年団では、かつて千葉恵博、高橋秀昂に稽古を受けた寺岡徹男が指導者となり、渡智治（音更）金沢宏志（帯広）高橋信吾（幕別）等を育てた。彼等もまた先輩の意志を継ぎそれぞれの地で少年団の指導に情熱を傾注し若い芽を着実に育てている少年達の道場での稽古は彼等の人生での貴重な社会勉強であろう。人生にとって遙かなる理想の道を求め生涯をかけている指導者もたゆまぬ精進と鍛練が必ずや己に何かを教えてくれると信じるのが剣の道である。

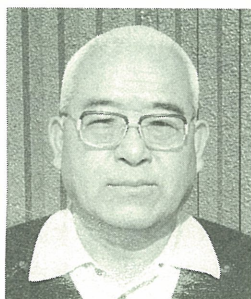
今、無心に竹刀を握っている子供が遠い日に必ず第二、第三の黄金時代を築いてくれるであろう。

〈62年現在役員名〉

顧問 大久保正司
 会長 山角 芳信
 副会長 山口 秀勝 (全十勝剣連幕別支部長) 中橋 定雄
 理事長 高橋 秀昂
 二ツ山 智 (少年団指導部長 札内)
 寺岡 徹男 (少年団指導部長 幕別)
 高橋 信吾 (青年部長)
 監事長 金沢 誠
 監事 佐藤 俊克
 事務局長 橋本 正司



〈顧問〉
大久保正司



〈会長〉
山角 芳信



〈副会長〉
山口 秀勝



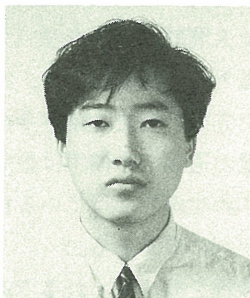
〈副会長〉
中橋 定雄



〈理事長〉
高橋 秀昂



〈事務局長〉
橋本 正司



〈青年部長〉
高橋 信吾



〈少年団指導部長〉
(幕別) 寺岡 徹男



〈少年団指導部長〉
(札内) 二ツ山 智



52年受賞時



札幌剣道スポーツ少年団 入団記念（昭和59年6月30日）



幕別剣道少年団 お楽しみ会（昭和59年8月11日）